年譜　青山武雄

青　山　　愷

1906年（明治39）6月7日

愛媛県越智郡今治町大字本町125番戸（現在の今治市本町）にて父政治、母トラの4男（6男、2女）として誕生

青山家は愛媛県周桑郡清水村新谷（にや）新田（今治市新谷）の在であり、今治久松藩に出仕する下級武士で、祖父八右衛門は御船手頭であった。

父政治は、青年期に藩家老の子息が住友別子銅山で鉱石運搬業を始めるのに協力し別子の地にあったが、明治中期鉱夫騒動が頻発したので、家族と共に今治に帰り、のちは母トラが高砂町（南大門町一丁目市民会館南）で小さな雑貨商を営み家計を支えた。

1912年（明治45）6才

今治市立第一尋常小学校入学

1922年（大正11）16才

今治市立今治青年学校卒業、五十二銀行今治支店（現在の伊予銀行）に入行

銀行では順次簿記会計を習得し、算盤を覚え、銀行員による県下珠算大会では1位になった。

この頃より、日本組合基督教会今治教会の礼拝に出席。翌1923年、露無文治牧師より洗礼を受け、終生をキリスト者として生きた。

今治教会は横井少楠の子息で、いわゆる熊本バンドの一人であった横井時雄が新島襄の指導により明治12年創立した教会である。今治は瀬戸内海に面した港町として栄えた街であるが、明治中期になりタオル製造業が起こった。この工場主たちが今治教会を形作った。近代の時代と精神とが造った日本では特異の教会である。

この教会生活で飯忠太郎など多くの先輩知己を得、指導を受けた。

文芸にも興味をもち、ハイネやブロウニング、ゲーテの詩や文学を読み、ベートーヴェンの音楽を好んだ。

自らも寓（しげる）と号し、創作し文芸誌『青き幻（まぼろし）』を編集し各地の文芸誌と交流した。ひそかに文筆で身を立てようとも思っていた。コーラス・グループでは風の中に、美しく青きドナウ、リゴレットなどを合唱し今治市公会堂での演奏会に参加した。

この頃今治にも社会主義の思潮が押し寄せてきた。ほうがそう（よもぎ）と称された長髪の帝大生がしばしばオルグに訪ねてきて話し込んだがキリスト教信仰に関心をいだいており社会主義にはなじむことが出来なかった。

1924年（大正13）18才

4月

（日本組合基督教会霊南坂教会）霊南坂神学校入学

かねてより英語を好み勉強を続けていたが、勉学にたいする思い止みがたく五十二銀行を退職し進学することを決意し上京した。

神学校では小崎弘道（校長、霊南坂教会）、小崎道雄（霊南坂教会）らの教師からキリスト教神学を学び、教会教職者の訓練をうけた。とくに神学生として小崎弘道の霊南坂教会を手伝い公私にわたって指導をうけた。教会日曜学校には奈良岡朋子（女優）姉妹が出席していた。

2年修了時、賀川豊彦の聖書（連続）講演会を催し、その前座をつとめ新約聖書について発表した。

1926年（大正15）20才

4月

同志社大学専門部（同志社専門学校）神学科入学

霊南坂神学校閉校にともない、大正15年4月同志社総長（学長でもあった）海老名弾正をしたい同志社に入学する。

京都ではしばらく海老名家に寄寓し、のち学寮で生活する。

神学科では富森京次、芦田慶治、大塚節治、ラーネッドなど全盛時の諸教授の講義に出席したほか、高坂正顕教授（京都大学）の授業にも出席した。とくに大塚節治先生から知遇を得、学的訓練を受けた。3学年卒業時には「イエスの最高善観（共観福音書に由る）」と題した小論を書いた。

また、大山寛（京都教会）、岸本貞治（千歳北光教会）、内田智雄（同志社大学

法学部教授）などの学友との交友が生まれた。

大塚節治　1887～1977　広島県出身、同志社大学、ユニオン神学校、コロンビア大学で学ぶ。
同志社大学神学部教授（組織神学）。1950年代同志社大学の復興、発展期に大学長、総長、理事長など重責を担う。温厚篤実の人。長崎外国語短期大学の設置をたすけ、また学校法人長崎学院理事を勤める。

日本組合基督教会熊本教会（熊本草葉町教会）に夏期伝道師（学生）として無牧の教会に派遣される。

1929年（昭和4）23才

3月

同志社大学専門部神学科卒業、日本組合基督教会松山教会、及び郡中教会伝道師任職

1929年（昭和4）3月同志社を卒業、宣教の前線に出ずるこころざし止みがたく召命を感じて郷里今治に近く、又歴史のある日本組合基督教会松山教会とその支教会である郡中教会に赴任した。

松山教会機関紙『みつばさ』の編集を引受け説教、小論を書いた。

1929年（昭和4）11月、いわゆる県令（知事）問題が起こった。

1927年の第1次山東出兵、翌28年の中国東北部（旧満州）における張作霖爆殺事件などわが国の大陸への侵略が進むとともに、宗教団体とその活動を規制する宗教法が検討された。とくにキリスト教は英米の敵性宗教とみなされ監視、規制はきびしかった。愛媛県ではこれを「県令問題」といった。まさに1939年（昭和14）の宗教団体法の前触れであった。

信仰の自由を護るため愛媛県下の教会は、こぞって反対運動を展開した。県当局に抗議をし、上京して文部大臣に請願をなした。県知事もこれを撤回せざるを得なかった。

また、この時期には地元紙、基督教世界紙などに信教の自由やキリスト教神学についての論稿を寄せた。わずか2年の短い期間であったが若い情熱を教会のために傾けた。

県令問題おこり、知事・文部大臣に請願し、撤回される。

県令94号「神仏道外の宗教に関する規則」

第5条「神社、学校、病院トノ距離200メートル以内ニ教会ノ設立ヲ禁ズ」

第17条「知事ノ命ズル検査官ニ対シ故ナク検査ヲ拒ミタル者ハ拘留又ハ科料ニ処ス」等は、いちじるしく信教の自由を阻害するものであって、県下の教会は連合して反対、その撤廃運動を展開した。

青山伝道師等、県令問題解決に当たり、信教の自由について熱弁する。（12月15日（日））12月14日午前、県庁において県令問題最後の会見をし、県会でも取り上げて、遂に知事はこれを撤回した。（松山教会百年史稿136頁）

更に中央に青年闘士青山武雄君（松山組合教会副牧師）を派遣して文部大臣に一地方官の分際を以て、憲法破棄の悪県令を発布した不法行為を直ちに禁止するように請願した後、青山君はこの悪法令を発布すると同時に、身をかわして三重県に転任した市村惠三知事を訪問して、彼が自ら告白する如く内容を知らずして、厖大なる悪法に目くら判を押したとしても責任は免れず、事国民の信教の自由が維持されるや否やの重大なる問題なれば、速やかに愛媛県当局に善処するよう勧告されたいと促して同氏の承諾を得て帰った。（『S・P・フルトンの生涯と神学思想』278頁）

1930年（昭和5）24才

3月

郡中教会、教会堂建築を決定

郡中教会が教会堂建築に踏み切り、予算2,000円で募金中（青山武雄伝道師）（『松山教会百年史稿』141頁）

9月3日

父政治　今治市にて死去　72才

1931年（昭和6）25才

4月

日本組合基督教会平野教会（神戸市）主任伝道師任職

1931年（昭和6）4月、日本組合基督教会平野教会（神戸平野教会）から主任伝道師として招聘をうけた。1937年（昭和12）までの6カ年をこの教会の教会

伝道にあたった。神戸は牧師としての初任地となった。5.15事件、満州事変（日中15年戦争のはじまり）、アメリカに端を発した世界恐慌による不況などわが国の状勢は急変を見ていたが、それでも昭和初期の神戸での市民生活は妹尾河童の「少年H」に描かれている様に活気があり都会的な楽しさに満ちていた。

1932年（昭和7）26才

4月

松山市にて平岡徳次郎牧師司式、西村清雄氏夫妻媒酌にて三好長良長女とし子（彪子）と結婚

三好氏は室町時代阿波池田より現在の松山市辻町（JR松山駅西方）に移り朝美村（松山市朝美町）吉田浜（松山市、現在松山空港の一部）を開墾したいわゆる開拓豪農で代々村の名主であった。三好長慶（ながよし）にちなみ代々諱に長をつけるならわしがある。叔母岡島倭子は黒崎幸吉に属する無教会派クリスチャンで1963年（昭和38）兵庫県三木市に老人ホーム志染愛真ホームを創設し高齢者福祉のため尽くした。

1933年（昭和8）27才

4月

長男　愷　誕生

4男1女（愷、（三好）曠、恩、（笹島）能子、臨）をもうけ、神によりて、やすし（愷）など、神への信仰を表す名前を付けた。

1934年（昭和9）28才

按手礼を領し正教師（牧師）となる。

日本組合教会総会に於て、会長西尾幸太郎牧師から按手礼をうけ牧師職に任じられた。

比較的小規模な教会ではあるが、信仰的な教会員に恵まれて日曜学校、青年会、婦人会などがそれぞれ盛んに活動をなした。又、月報「平野の光」を発行し、バルト、ブルトマンなど当時のいわゆる弁証法神学などを紹介した。

余はもともと伝道者になる意思を少しも持っていなかった。人格、性格、何れ

の点から言っても余は到底その器ではない。神学校を志したのも単なる知的理由に因るものであった。余が受洗したのは今治教会であった。由来この教会は保守的、伝統的である。余は神が余をしてこの教会に生まれしめ給わった導きを感謝し、又これを誇りにしている。保守的空気の中に漲っている特有の清教徒的敬虔、基督に対する貞節、罪における赦し、十字架の救いの確かさ、余はあの厳粛なものを忘れることが出来ない。その後先天的に自由人であり、疑惑的性格の余は、進んで新しい思想、進学に接したが、母教会において育まれた敬虔を失うことが出来なかった。

今や神は余のごとき者をして祖国の危機にたたしめ給う、誰が神の聖旨に抗し得んや、敢えて不肖を省みず、召命に応じんとするものである。

1935年（昭和10）29才

1月

三好　曠（次男）誕生

7月

求道者のための小著書『基督教根本要義』を発行する。

また、基督教世界紙にも寄稿をつづけた。

これらの思索がキリスト教理解を深めるとともに自己の信仰思想を形作っていった。

神戸では近接の多聞教会牧師今泉真幸氏（日本組合基督教会総会議長、日本聖書教会理事長）に日頃指導を受けた。又、神戸YMCAにも種々かかわりを持ち奉仕をなした。このときの経験が、戦後長崎YMCA設立、ひいては長崎外国語短期大学の創立につながった。

1936年（昭和11）30才

2月

神戸平野教会付属平野愛児園（現在の石井幼稚園）を開設し、園長を兼務する。

1937年（昭和12）31才

3月

次男曠の病状が好転せず医師に転地療養をすすめられやむなく平野教会を辞し、妻とし子の故郷松山市に行き1ヶ年間をすごした。この間初任教会であった松山教会で協力牧師として奉仕をなした。

1938年（昭和13）32才

6月

日本組合基督教会長崎教会（長崎馬町教会）牧師任職

1938年（昭和13）6月、日本組合基督教会長崎教会（日本基督教団長崎馬町教会）から招聘があり、千葉昌雄牧師引退のあとをうけ赴任した。

当初恐らく数年間の予定であったが戦争、戦後とつづき、また戦後、長崎YMCA、長崎外国語短期大学の創立となり、爾来36年に及び、長崎が生涯の地となった。

長崎でのプロテスタント教会の伝道は早く居留地時代の1859年（安政6）の英国国教会の開設にさかのぼる。明治5年の禁教令廃止後の1875年（明治8）には長崎基督教会（長崎聖三一教会）が創立された。

組合教会の設立はおそく、明治30年代に至り、すでに他の組合教会で信仰を得、長崎の地に移ってきた少数の人達が集会をもち、これらの人達が当時の伝道会社に指導者の派遣を要請した。明治34年になり、剣持省吾伝道師が任命され、翌1903年（明治35）、市内新大工町に会員23名をもって創設された。

1941年（昭和16）35才

10月

3男　恩、長女　能子誕生

1942年（昭和17）36才

4月

長崎東陵中学校（現在の長崎南山高等学校）教諭　就職

戦時体制となり国家総動員法、1941年（昭和16）の国民勤労報国協力令によって男性の職業は規制をうけた。教会の牧師も市内各所の工場に出勤する様になった。戦後東陵中学校長代行になった旧知の長崎医科大学（以下、「長崎医大」という）の国友鼎教授は、しきりに東山手町の長崎東陵中学校の教諭になることをすすめた。教会牧師のまま長崎東陵中学校に出勤した。長崎東陵中学校では英語、地理科目を担当した他、上級学校受験の指導を行った。

また1943年（昭和18）春頃より学徒動員が始まり、長崎東陵中学生も下級生を除き三菱重工長崎造船所、川南工業香焼工場などで生産にたずさわった。生徒の監督者として、あるいは長崎地区中学班長として三菱重工との折衝にあたった。

わずか3カ年余りであったが、30才後半のもっとも教師として充実した年齢でもあり授業に打ち込み熱心に進学の指導をした。この時の長崎東陵中学校での教育の経験が、のちの長崎外国語短期大学での教育に生かされた。

1943年（昭和18）37才

12月

長崎俘虜収容所を問安しX'masを祝う。（収容所長　調正路中尉〈同志社大学神学部卒〉）

1944年（昭和19）38才

2月

同志社大学神学部教授大塚節治氏より著書『基督教倫理学序説』（基督教思想叢書刊行会版）を贈られる。扉に「鉄肩擔道義」の言葉が書き込まれている。

1945年（昭和20）39才

6月

家族、松山市に疎開するも、同年7月の松山大空襲により被災する。

これより先、食糧の入手もだんだんと困難になってきた。

また1944年（昭和19）に入ると中国・桂林からB29が飛来し本土空襲が始まり、10月には大村海軍工廠（航空隊）が爆撃され、長崎も危険になった。疎開令が発布され小学生以下の児童の疎開が要求されたので6月、家族は妻とし子の故郷松山市に疎開した。

しかしここでも1945年（昭和20）7月の大空襲により家屋が全焼し、四散して生活した。

戦時下の長崎馬町教会

日本組合教会長崎教会は小規模でいまだ自給の出来ない教会であったが、古屋野宏平（被爆直後の長崎医大学長）、井上八郎右衛門（三菱電機長崎製作所所長）、宮副芳通（地元資産家）、各務孝平（のち三菱重工横浜造船所技師長）、進士安治（のち京都工芸繊維大学教授）など長い信仰生活をなした人が中心をなしており、また長崎医大、長崎経専、活水女寮の教師や学生達がいた。

婦人会は盛んで持ち回りの家庭集会が行なわれた他、古屋野充子夫人の案内で大村・小浜など長崎県下の陸・海軍病院に負傷兵の慰問に出かけて行っていた。

これらの教会員が戦時下のとくに周囲の監視の眼がきびしい困難な状況の中で礼拝をつづけ教会を護っていた。

日曜日の午後には外国人の動静を調べに特高や憲兵が訪ねて来た。又、毎月、教会の前を斎場に向う軍隊の行進があった。首から戦友の遺骨をさげ、銃剣のついた鉄砲を肩に荷負う大変勇ましく厳粛なものであった。それは年々増加していった。

政府の統制により各教派は合同し、1941年（昭和16）日本基督教団が成立した。日本組合教会長崎教会は日本基督教団長崎馬町教会となった。

しかしフィリピンが占領され、ラジオから「海行かば」が多く聴かれる様になる1944年（昭和19）頃までは特段変ることなく礼拝が守られていた。

青山武雄は1944年（昭和19）、日本基督教団より長崎支教区長に任ぜられ、それは戦後もつづけられ、地区教会の困難な問題の相談にあづかった。

1951年（昭和26）、教団において創設された長崎平和記念教会の初代ベスト牧師の任職式の司式を行っている。

8月9日

11時2分　長崎市　原爆被爆

学徒動員先の三菱重工長崎造船所で新型爆弾（原子爆弾）被爆、構内を歩行していたが、さいわいに建屋の蔭で外傷を負わなかった。直ちに全壊した三菱製鋼所に行き、負傷した生徒の手当、死亡生徒の捜索、遺体の収容をつづけた。さらに炉粕町より爆心地に近い城山町に移転した古屋野充子（宏平）夫人の所にかけつけ無事を確認し安心するも、後日容態が急変し8月30日死亡された。11日になり、長崎医科大学付属病院に角尾、古屋野、国房、高木などの教会関係者の安否をたずねた。

学長の角尾博士を先ず防空壕の中で発見した。先生は背部と腕に相当深い傷を負うていられたが気丈な方で患者運搬用のベッドの上に座って「沢山の先生や学生を殺して済みません」とあたかも悲劇を自己の責任かの如く、頭をたれてわびられた。その崇高な姿は忘るることのできない感銘であった。

解剖の高木教授はさっきまで元気であったそうであったが、急に弱られ、がっくり息が堪えてしまったそうである。不思議に体に外傷が一つもなかった。付近の学生に自宅に連絡してもらったが、なかなか夫人の到着がない。まっくらな闇の中で遺骸をまもって殆ど一夜を送ったが、聞こえてくる水をもとめる声、苦しみを訴えるうめき、その凄惨なことは鬼気迫る思いであった。

古屋野先生は少し傷を受けられたが概して元気であったので安心した。

法医学の国房先生は山に近い教室の焼失後の土間にムシロを敷いて蟲の息で臥していられた。夫人は自分に同行していたが、懸命に教授を慰めいたわっていた。同教授は翌日永眠された。他の教授方もつづいて死んでいかれた。

角尾先生はその後滑石で養生されていたが、22日ついに永眠された。

それぞれ形ばかりの告別式は私が司式を行った。困ったことには、お骨を収める壺がない。幸いに三菱にお願いして数個を手に入れることが出来、大いに役立った。

更に困ったのは高木教授の場合は遺骸を焼いてくれる人がない。止むを得ないので、そのまま埋めることにしたが、穴を掘って下さる方が無い。では自分が掘ろうと決心をして鍬をとり寄せにやったところ漸く大学本部の尽力で付近よりの応援の方々を向けてくれたので曲がった煙突の下に小さい穴を掘り遺骸をそのまま埋めた。あまりに深刻で、夫人の眼には涙も出なかった。次からは医局の先生方や本部の方々が臨時に隠亡になって次から次へ遺骸を焼いた。薬専の横山教授の如き、これで30幾体か焼きましたと語っていた。角尾先生の場合も丸太をくんで、この方が敬虔な姿で焼いて下さった。(『あの日の長崎医大』角尾博士のことども)

長崎原爆による被爆

1945年（昭和20）8月9日早朝、原爆を搭載したアメリカ軍機はテニアン（島）を発進し、まず小倉市に向かったが雲のため目視爆撃が出来ず攻撃目標を長崎市に変更、同11時2分、同市上空より投下、長崎市松山上空500ｍで炸裂した。

被爆により死者73,000人、重軽傷者74,000人(長崎市原爆資料保存委員会推計、昭和25年）の死傷者があり、全焼・全壊13,000戸、大破5,000戸の家屋の倒壊があり長崎市浦上は完全に焼野原となり、旧市街も各地で出火類焼した。

それ以後、被爆者は原爆症に苦しんでいる。(『長崎原爆戦災史』第4巻)

長崎馬町教会は北側より爆風を受け側壁が折れ屋根が落ち使用不能となった。また教会裏地の牧師館の被害もひどくガラス片が部屋中に散乱、柱、壁や畳に深く刺さり居住出来る状態でなかった。

1945年（昭和20）39才

8月

長崎市夫婦川町66番地に転居

原爆被災により教会牧師館が使用不能となり高木氏（馬町教会員、長崎医科大教授）宅に転居、爾後29年間をこの地ですごす。

同氏は8月9日長崎医大で勤務中被爆し死亡されたので、夫人はあとを託し故郷岡山に引き揚げた。

長崎市南部、東山手町にあった長崎東陵中学校舎は被爆をまぬがれた。しかし校長は退役軍人のため敗戦後ただちに辞職、教頭も夫人の爆死により退職された。校務代行者として残された僅かの教職員によって戦後の教育が始められた。

秋にいたり、徐々に教職員も復員し学園の整備がすすめられた。

10月

西彼杵郡、五島列島旅行

原爆の後片付けもようやく終わった10月下旬、思いたって旅行に出かけた。歩いて西彼杵半島を北上し、七ツ釜を経て崎戸から漁船に乗り上五島（似首郷（にたくびごう））にわたり、ついで奈良尾に出た。

その間にキリスト教による精神文化の再建をねがい学校と社会福祉事業およびキリスト教の宣教を併せた長崎YMCA運動の再建を構想し学校の設立を考えた。

帰るとただちに古屋野宏平など長崎市内キリスト教会有志と相はかり、長崎YMCA再建を確定した。

11月

長崎基督教青年会維持財団より法人名義、権利の譲渡を受ける。

長崎YMCAは1930年（昭和5）日中戦争の拡大に伴い経営が困難となり会館を売却、活動を停止した。法人組織は存続していたので、当時長崎県南高来郡加津佐に疎開中の野田鉱四郎理事長代行を訪問し譲渡の承諾を得、印鑑を受け取る。

12月1日

長崎市馬町39番地　長崎馬町教会に長崎キリスト教青年会（YMCA）を創設、総主事に就任

総主事のほか、職員として平野英二、三好明子が就任した。会館が必要であったため長崎市に原爆により内部が焼失していた市公会堂（旧長崎YMCA会館）の譲渡を申し入れたが長崎市にも復旧の計画があったためやむなく他の敷地を斡

旋してもらう様に依頼した。

僕の一生忘れることのできない「山歩き」は終戦の年の10月下旬、西彼の海岸線にそうて七ツ釜から五島を殆ど一週間をつかって歩いたことである。（七ツ釜からは小船で崎戸に渡り、更に小さい漁船に託して五島の似首に上陸し、南下して奈良尾に出た。）荷物も何もない、僅かに小さなバイブルとトマス・アケンピスの「イミタチヨ･クリスチ」が懐にあるのみ､さんざん歩き疲れれば宿に入って泊まり、夜はほの暗い旅の夜の侘びしい光の下で村の人や青年達と語り、朝は未明に起きてトマス・アケンピスをひもといた。

この旅で接した人々の心遣いと温かい真心、それは似首で味わった新鮮な魚の味と共に忘れることのできない想い出となっている。（NHKラジオ放送「季節と共に」）

1946年（昭和21）40才

1月

長崎YMCA英語講習会初級科、中級科を長崎古町教会に開校、のち長崎銀屋町教会に移転

戦後まもなくであったが初級科には50数名、中級科には20数名の受講生があった。しかし1学期末の3月末には初級科14、5名、中級科1、2名となる。

2・3月

長崎YMCA（旧制高校・専門学校）受験科を開設（短期間）

海外引揚者、復員軍人、食糧難のため進学出来なかったもの、帰郷したものなど向学心のある青年が多かった。長崎経専、活水女専の教師が教育に当たり、旧制佐高、七高、早稲田大学予科などに進学した。

4月

長崎YMCA、長崎馬町教会の復旧がなり移転。婦人教養科（修学年限1カ年）を開設

長崎馬町教会堂は原爆の爆風により倒壊したが、さいわいに片側側壁が残ったので応急の修復をし新たに2階部分に教室を設けた。

また近隣にあった長崎バプテスト教会も借用し以後1948年（昭和23）9月長崎YMCA会館竣工まで両会堂が教室であった。

6月

長崎県社会教育委員（～1949年5月）

緒方純雄氏、長崎馬町教会伝道師就任（～1949年3月）、長崎YMCAを兼務する。

9月

長崎YMCA、大学予備科を開設

長崎YMCA大学予備科は旧制高校、専門学校の課程にあたり、長崎外国語学校、長崎外国語短期大学の源流となる。

12月

4男　臨　誕生

外大二十周年史資料（一）

外大の前身たる英語学校は講習会の形式で、終戦の年の12月1日、長崎市馬町にあった創立者の自宅2階の一室で事務所開きをした。参加したものは、創立者と事務員の平野英二君（現在家庭裁判所調査官）と三好明子君（逝去）の計3名で、開校式というような儀式らしいものは何一つなかった。ただ3人で学校の将来をひたすら神に祈った。

早速生徒募集が始まった。クラスは英語初級科と中級科、授業は21年の1月から開始した。講師は小倉勝一、中尾大典の両先生、2月から岩崎ヤス氏が加わった。教室は古町教会を借用した。生徒は最初、初級科50名位、中級科20数名あったが、語学の勉強にはよほどの辛抱がいる。それに堪えられないものが多く、一人減り、二人減りで、3月の末になって1学期が終わる頃には、初級科14、5名、中級科1、2名になった。中級科の先生は恐縮して、済まぬから辞任するといって最後の講義には休講といって自分で欠席する始末であった。しかし校長は断乎として「よし生徒が一人になっても授業はつづける。生徒の辛抱がつづくか、学校の根気が勝つか、勝負する。」と職員を激励した。

4月から藤田靖子、6月から緒方純雄の両先生が加わったので、新たに婦人教養科のクラスが始まった教室も馬町の修繕が成ったので、これに移転した。

9月に大学予備科が始まり、講師として松野賢吾、根岸英介、酒井彦四郎、土

居重政先生が加わり授業も漸次活気をおびてくるようになった。この間事務に浅野貞子（2月）松山喜久（5月）の二嬢が奉仕してくれた。（『長崎外大時報』10号）

外大二十五周年史資料（二）

大学予備科

前号に大学予備科が21年9月に始まったとしているが、もっと短期のものが、すでに同年2月から3月にかけて行われている。正確に言うと、これらは大学予備科ではなく、旧制中学卒業生を、旧制高校に入れる準備の為に行われたものである。何故このようなことに本学が手をつけたかと言うと、終戦でおびただしい青年が除隊して帰郷してきた。彼等の大部分は中学を終わるか、終わらないうちに学業を投げすて、学徒動員に応じたものである。敗戦でもっとも鋭く良心的な痛手を受けたのはこの人々である。彼等は挫折感と絶望で全く虚脱状態になって、復学する意欲もなく、盛り場を、ただわけもなく徒党をくんで彷徨した。それは青年非行の原因ともなった。我々はそれを傍観する事ができなかった。この人々を集めて教育し、再び学業に就く志を喚起したい。彼等は再建日本の大切な担い手である。これは我々の使命である。と本気で考えた。この試みと努力は成功して、4月には、多数の学生を、佐高、五高に入学させる事ができた。

この事業に協賛して、21年2月から授業を担当して下さった人々は岩崎ヤス、松野賢吾、中条良平、伊東勇太郎、横山復次、有田邦雄、池田祐直、千葉胤雄、吉富新一の諸先生であり、更に、4月から重藤威夫、山辺六郎の先生方が加わって下さった。

事務職員としては、同年2月に浅野貞子、5月に松山喜久の諸嬢が就任した。（『長崎外大時報』11号）

婦人教養科の誕生

21年4月から婦人教養科が生まれ、専任として、藤田靖子先生、それに6月から緒方純雄先生が加わった。この時に馬町の仮校舎の改築ができたので、古町よりここに移った。そこで若い婦人を相手に、語学と経済学、その他の一般教養を組み合わせて、婦人教養科を始めた。修業年限一カ年、20名程度の学生が応募して2年間続いた。（『長崎外大時報』11号）

1946年（昭和21）40才

長崎YMCAは巌本真理のバイオリン演奏会を催す。

三菱会館は駐留軍に接収され、やむなく防空のため天井のない長崎県立女学校の講堂で演奏会を行った。その後順次、原智恵子、モギレフスキーなどの演奏会をプロモートした。モギレフスキーはあの病床にあった永井隆博士の1坪余りの如己堂での演奏の申し出をした。当初博士は固辞されたが、近接の盲唖学校の生徒と一緒に演奏会を聞き大変感激された。また、モギレフスキーも生涯忘れることの出来ない演奏会だったと語った。（ＮＨＫラジオ放送「季節と共に」）

1947年（昭和22）41才

2月

長崎YMCA常任委員会を構成し、委員長に古屋野宏平、常務理事に総主事青山武雄を選任する。

長崎県食糧委員（～1949年）

長崎市公職適否審査委員（～1949年）

長崎市留守家族会長

2月28日

青山武雄　長崎外国語学校を設立し校長に就任、同校は同年4月30日長崎県知事の許可を得る。

4月4日

長崎市は長崎YMCA会館建設を援助し、土地1,000坪を提供する用意があると言明。

4月19日

長崎YMCAは旧長崎基督教青年会維持財団を継承（合併）し、長崎基督教青年会維持財団に改組する。

常任委員会は法人理事会となる。

4月28日

長崎外国語学校（修業年限3カ年）、大橋市長を迎えて第1回入学式を行う。

入学者：英文科30名、商科50名、長崎馬町教会を本校舎とし、同市勝山町長崎バプテスト教会を併せて使用する。

6月25日

長崎YMCAは建設後援会（会長　大橋市長、副会長　脇山勘助、中部悦良）を結成する。

昭和25年3月31日までに454万6千175円を募金した。YMCA復興資金1万ドル、共同募金100万円などである。同会にて、長崎市（大橋市長）は長崎YMCA会館用地として同市本大工町の土地1,000坪の提供の意志のあることを説明されたが、のち土地所有者の同意を得、同市本大工町1番地833坪（2,750㎡）を借地することを決議、県都市計画審議会などの承認の手続きをした。

1948年（昭和23）42才

5月

長崎県留守家族連合会長（～1953年）

長崎県共同募金委員（～1949年）

7月21日

長崎ユネスコ協力会副会長、のち会長を務める。

終戦後、日本は連合軍の占領下にあり、国際的孤児であると言われた。青山武雄は偶然にもCIE図書館でユネスコ（国際連合教育科学文化機構）の存在と理念を知り、市民に呼びかけ長崎ユネスコ協力会（会長　大畑文七、副会長　松本静治、青山武雄）を結成した。日本政府の主導によって民間ユネスコ運動組織として日本ユネスコ協力会連盟と各県ユネスコ協力会が結成された。それらの活動を基に日本は1951年ユネスコに加盟した。戦後わが国最初の国際機関への復帰加盟となった。

長崎ユネスコ協会の創立

青山　武雄

どこから仕入れた情報か、多分CIE図書館だったと思うが、わたくしはユネスコについてのすばらしい知識に接触した。それは昭和23年のまだ寒い季節だと記憶する。わたくしは夢中になって、ユネスコに飛びついた。終戦直後、日本の地位を評して、国際孤児だというものがあった。たしかに日本はけんか（戦争）好きの嫌われものとして、どこの国からも相手にされず、どの国際団体からも仲間外れにされていた。いきづまるような圧迫感と疎外感、どこかでいきぬきをみ

つけたい。そして平和に対する素朴な熱意、これらがわたくしをユネスコに夢中に駆り立てた。

早速、同僚の佐藤三郎君（長崎YMCA主事）に話してみたら大賛成、更に代議士の若松寅雄氏にもちかけてみると、流石前外交官だけあって直ぐ了解、そこで運動の手始めに若松氏を講師としてユネスコ講演会を開催した。5・60名の来会者があったと思うが、集会後ユネスコ協力会設立の提案がなされた。そしてわたくしが準備委員長に選ばれた。

設立に当たって、この運動は一部少数者のものではなく、全市民的なものでなければならぬと考えていたので、佐藤君執筆の趣意書をしないのあらゆる職業、階層の人々（約千名）に送って、協賛をもとめ、発起人たることを勧奨した。

もとめに応じて発起人たることを承諾したもの約200名、7月21日を期して創立総会をもった。司会は労働組合長、わたくしが発起人代表として挨拶、開会の辞が地方銀行頭取、なかなか面白い取り組みだった。京都では敗戦国の謹慎中の身分でユネスコ運動なんか僭越の限りと叱られたそうであるが、長崎では軍政府がおおいに協力してくれて、多分当日司令官が出席してくれたと記憶する。外務省からも人をよこして下さった。ありがたい次第である。

新しい会の会長には教育界の元老、大畑文七氏に白羽の矢を立てて交渉したところ、快諾、それに最初から熱心に創立のため尽力してくれた会議所議員の松本さんとわたくしが副会長ということになり、全ての陣容が整ってここに長崎ユネスコ協力会がめでたく設立となった次第です。

それから25年、想い出はつきない。（創立25周年記念誌『ながさきユネスコ』）

7月21日

長崎県引揚同胞愛の運動会長（～1953年）

8月14日

長崎ユネスコ協力会、講演会を催す。講師　湯浅八郎氏（のち国際基督教大学初代学長）

長崎ユネスコ協力会は武田清子氏（1949年）、森戸辰男氏（1949年）、田中耕太郎氏（1950年）、谷川徹三氏（1951年）、高橋正雄氏（1953年）、藤山愛一郎氏（1953年）、菊地勇氏（1955年）などを招き講演会を催し、ユネスコ運動の啓蒙活動を行った。

9月

長崎本大工町1番地に長崎YMCA会館が竣工し、長崎YMCAおよび長崎外国語学校は同市馬町から移転した。

J.ウィルソン氏　長崎YMCA教育部主事に着任する。(3カ年間)

長崎YMCA及び長崎外国語学校初代アメリカ人教師となる。

11月

長崎市地方労働基準審議会委員、のち部会長を勤める。(～1974年2月)

12月8日

長崎YMCA、長崎ワイズメンクラブ設立。以後月例会を開催する。

12月15日

米国YMCA代表　ダーギン氏を迎えて長崎YMCA会館献館式を行う。

長崎YMCA会館は木造セメント瓦葺二階建　延坪387坪、建築費650万円を要した。建築資材の手当が困難なため、三菱重工業長崎造船所より戦時中建設し殆ど使用していなかった小ヶ倉寮3棟の払い下げを受け使用した他、ガラスは駐留軍の好意により特別の配給によった。

同会館は当時市内に適当なる市民の集会場がなかったので、諸集会に利用され、あらゆる公私の集会が行われた。

同会館竣工と共に教育事業、社会事業などが一層活発となった。

なお、同会館に事務所をもったものは、長崎ユネスコ協力会、世界連邦運動、長崎市留守家族会、原爆2世の会、長崎レクリエーション振興会、社会教育懇話会、社会事業懇話会などであった。

1949年（昭和24）43才

2月

長崎市傷病者保護対策委員（～1951年2月）

3月

日本基督教団長崎馬町教会主任担任教師（牧師）辞任

3月19日

長崎YMCA理事会、長崎外国語学校専門部を短期大学に昇格（設置）申請することを決議する。

青山武雄、学長に就任

6月

長崎県地方労働委員（～1950年5月）

　敗戦による政治的・経済的混乱は多くの労働争議を発生せしめた。長崎県に於いても国鉄、川南工業、北松炭田の炭坑などの争議がつぎつぎにおこった。長崎市ではダンスホールの従業員の労働条件改善要求のストライキまであった。

　政府は労働三法を相次いで制定し労働者の労働基本権を保障する法整備をした。これにより中央・地方（県）労働委員会の争議調停が行われる様になった。

　1948年（昭和23）11月、長崎地方労働基準審議会委員に任命され（～1974年2月）、ついで1949年（昭和24）6月には長崎県地方労働委員に任命された。（～1950年5月）

　激しく対立する争議の調停に加わり、争議中の炭坑などの状況を視察した。

　なお、1949年から50年にかけて長崎YMCA会議室が地方（県）労働委員会の会議に16回にわたって利用されている。

（長崎県地方労働委員会編『長崎労働組合運動史』）

8月9日

長崎ユネスコ協力会、長崎国際文化都市建設法が施行され、長崎市は原爆被爆中心地に於いて長崎国際文化都市制定記念式を挙行する。同市は長崎国際文化都市を宣言し、長崎ユネスコ協会長石田寿は平和宣言を発表した。

長崎市ユネスコ人平和宣言

　永く国際都市としての伝統をもつ我ら長崎市は、4年前の今日、原子爆弾の「火の洗礼」に由って平和愛好の精神を根本的に新たにした。加うるに日本国会において長崎国際文化都市建設法が議決せられたので、市民はここに新たなる決意と精神をもって世界永久平和の象徴たる新都市建設に邁進せんとしている。

　この時に当たり我らはユネスコの精神とその普及こそ新長崎市の精神的基礎であり国際平和の最も確実なる道であることを確信し、各国ユネスコの協力を期待して左のことを宣言する。

一、我らは文化と人間性の破壊者たる戦争に絶対反対する。
二、我らは教育の再建と国際文化の自由なる交流並に社会的正義と国際友誼こそ永久平和の条件たることを確認する。
三、我らはユネスコを信頼し、ユネスコの忠実なる使徒たることを誓う。
石田寿氏（長崎地裁所長）は『雅子斃れず—長崎原子爆弾記』婦人タイムズ刊行　雅子氏、編者 穣一氏（元東京高裁長官）の父。

10月29日
長崎ユネスコ協力会、ユネスコ九州大会を三菱会館にて開催す。

1950年（昭和25）44才
3月10日
長崎外国語学校専門部（第1回）卒業式、卒業生30名

3月14日
長崎外国語短期大学米英語科設立（置）認可される。

3月31日
長崎外国語学校専門部に（旧制）中学校・女学校英語科教員免許無試験検定の特典を与えられる。

文部省により在学生に英語学力試験があり、それにより（旧制）中学校・女学校の教員免許の取得が無試験で可能となった。

4月15日
長崎外国語短期大学（第1回）入学式、入学生53名

4月25日
開学式を挙行、荒川文六元九州大学総長が記念講演を行う。

5月
長崎県公共職業安定委員（～1952年4月）

6月

図書館・科学教室が西南の角に竣工した。

長崎YMCA会館建設後援会（会長・松田一三氏）の寄付に負う。以後科学教室（調理教室を兼ねる）にて長崎YMCA料理教室が開かれる。（世話人・青山とし子）

8月

日本ユネスコ協力会連盟理事（～1974年2月）

10月27日（～29日）

長崎ユネスコ協力会、第6回日本ユネスコ運動全国大会（雲仙・長崎市）を催す。

12月9日

長崎県調停委員（—1952年）

1951年（昭和26）45才

3月8日

長崎YMCA（理事会）、財団法人長崎基督教青年会を学校法人長崎YMCA学院に組織・名称を変更する。

私立学校法の成立施行により短期大学は学校法人の設置するところとなった。

長崎外国語短期大学の法人格維持のため、長崎YMCA（法人・理事会）は財団法人長崎基督教青年会を学校法人長崎YMCA学院に改組・名称を変更し登記をなした。

長崎YMCA（事業体）は、引き続き青山武雄が総主事としてその事業を継続したが、法人格を失い無財産となった。日本YMCA同盟はこれにつき憂慮の意を表した。

3月31日

長崎外国語短期大学米英語科、中学校英語科教職課程の設置が許可される。

昭和22年発足の新制（度）中学は英語科教員が充足できず不足がちであった。本学卒業生も当時不便であった離島に多数が赴任した。（1990年度長崎県内管理者数・中学校長15、小学校長3）

8月

長崎外国語短期大学第1回同窓会（クラス会）

8月28日

長崎外国語短期大学、大学だより第1号発刊

10月

長崎県社会福祉協議会理事（～1956年9月）

11月10日

長崎YMCA（学校法人長崎YMCA学院）は長崎YMCAの組織改正につき、日本YMCA同盟の要請を受け、新たに財団法人を設立しYMCA事業を維持管理せしめることを決定した。

11月14日

長崎YMCA、日比親善子供会、県下各地の小・中・高校、婦人会からの手作り人形および絵画、4千数百点をフィリピンの児童・学校に贈る。ベイドニア・ナチ号J.フェロー船長に託した。

1952年（昭和27）46才

3月10日

長崎外国語短期大学第1回卒業式、卒業生33名。

長崎外国語短期大学沿革

長崎外国語学校創立は、昭和20年8月の終戦を機会に実現の緒につき、同年12月1日長崎市馬町39番地に、創立事務所を設置し、開校の準備を行った。

終戦が一億国民に深刻な衝撃を与えたことはいうまでもないが、特に学業半ばに、一切をなげうって、戦場に赴いた学生、生徒がうけた打撃はたとえようがなかった。かれらは挫折感と絶望で、勉学する意欲を全く失い、虚脱状態で徒らに街々を彷徨した。これは心ある日本人にとって敗戦以上に忍びがたいことであった。これらを先ず学校に戻して、将来日本の復興のための人材にしなければならない。これが急務である。

明治維新が教育で始まったように、新しい日本の再建は教育による外はない。しかし教育と言っても、従来のような独りよがりの固ろうなものであってはなら

ない。広く海外の文化を摂取して、世界的な視野と教養を身につけた人物を養うものでなくてはならない。この目的を実現する近道は語学教育である。諸外国の言語を学び、その背景にある各民族の豊かな歴史、文化、生活を把握する。そこに直接の理解と友情が成立する。このような観点から新しい外国語学校の創立が決意された。

幸い、長崎は昔から海外との交通が繁しく、徳川鎖国の時代ですら、日本の開かれた唯一の窓であった。従って海外文化に対する市民の関心は強く、維新前すでにわが国最初の外国語学校が開かれ、日本各地から有為の青年が雲の如く集まったところである。今日においても、長崎は国際的雰囲気の濃い、外国語履修には最適の地である。

新しい学校には、次の如き基本的理念が要請された。

一つ、人間は何物にも拘束されることのない、自由、自主の存在である。従ってこの学校の目標は主体的人間の自覚をよびおこす教育でなければならぬこと。二つ、他人、更に社会、国家は、単なる自己実現の手段、道具ではなく、むしろ自己を規定し制約するものであることを確認する教育。三つ、われわれの学園は神と人に奉仕することに生きがいを感ずる責任あるものでなければならない。

これらの理念が深く、プロテスタント主義の精神に基づいていることは、説明するまでもない。従ってこの学校は当初からキリスト教主義教育を明確に打ち出した。このことは一つには、現在の教育がややもすれば機械的、技術的なものに堕していることに対する反省でもある。教育は、どこまでも個性を尚び、人格を尊ぶ精神的作業でなければならない。そして、根本的理念と、これを実現するエネルギーを、キリスト教精神にもとめたものである。

かくて、昭和22年2月28日、長崎外国語学校として、認可を受けた。この学校の中心は専門部で、専門部は、これを英文科と商科に別け、各50名の学生を選抜、入学せしめた。尚これとは別に、夜間英語専攻科を設け、志ある多くの市民の語学教育センターとしたので、40名以上の入学者があった。

翌23年9月には待望の新校舎が、長崎市本大工町に竣工した。教員も学生も創業の精神に燃え、熱心に研さんし努力した甲斐があらわれ、昭和24年12月30日卒業に先だって行われた文部省係官による実力検定試験において、優秀な成績をあげたので、昭和25年3月以降の卒業生全員に対し、英語科または商業科の旧制中学校教員無試験検定の取扱を許可された。

これよりさき、学校教育法の一部改正があり、新たに短期大学の制度が定められたので、本校を短期大学に昇格されることに決定した。これについては、長崎市並びに市民有力者の絶大なる支援があり、ついに昭和25年3月長崎外国語短

期大学設立の許可を得、同年4月第1回の入学式を行い、ついで5月26日開学式を挙げた。昭和26年3月には学校法人設立の許可が、文部大臣によって与えられた。

昭和46年学生要覧に記載されたもの、なお開学当初より沿革は書かれ少しずつ加筆されている。

4月

J. ウィルソン氏、不法滞在のかどでGHQにより強制送還される。

長崎YMCA教育主事J. ウィルソン氏は、昭和23年9月、ジェイ・スリー（ミッションボード派遣）として来日し、長崎YMCA及び長崎外国語学校（短期大学）の初代英会話教師として3カ年間長崎YMCA会館に住み教鞭をとった。

期間終了後も長崎にとどまり市内各校で英会話を教授し、ガンジーの非暴力抵抗主義による平和運動のため平和会を組織し、会長としてわが国の再軍備単独講和条約及び朝鮮戦争に反対する市民運動をしていたが、CICは昭和27年4月28日、不法滞在のかどで身柄を強制送還した。

1950年（昭和25）6月、北朝鮮軍が38度線を突破して南下し8月には釜山近くまでせまり、韓国全土を席捲する勢いであった。国連軍（米軍）が仁川に上陸し反撃に転じ平壌を占領し10月には鴨緑江に達した。しかし中国が危機を感じ中国義勇軍が参戦し一進一退の激しい戦いが1カ年間繰り広げられた。

1953年（昭和28）7月に至り、38度線を軍事境界線とする軍事休戦協定が成立し休戦した。

1953年（昭和28）47才

6月2日

長崎原爆乙女の会

広島に於いて谷本清牧師（広島流川教会）を中心とする広島原爆乙女の会が結成され、被爆女性の治療、生活支援を行っていた。谷本牧師の働きかけにより1953年（昭和28）に長崎でも運動が始められたが、充分な活動が出来なかった。

昭和28年「広島長崎原爆乙女交歓会」を契機として渡辺千恵子を中心とする会が出来、その後活発な活動がなされた。

8月1日

長崎外国語短期大学同窓会結成（理事長・宮副末男）

11月30日

『大塚節治先生を語る』（基督教研究･27巻2･3号、同志社大学神学部）を執筆する。

1954年（昭和29）48才

2月15日

長崎外国語短期大学米英語科第2部（修業年限2カ年）設置認可される。

4月1日

長崎外国語短期大学、中学・高校の英語科、中学の職業科、高校の商業科の教員免許状授与につき認定される。

4月

第2部第1回入学式、入学者78名

長崎外国語短期大学第2部の設置により、長崎外国語学校（夜間課程）は廃止された。

1955年（昭和30）49才

7月

日本ユネスコ国内委員会調査委員（～1955年6月）

7月5日

長崎外国語短期大学『論叢』第1号発刊

8月1日

文部大臣（松村謙三）より日本ユネスコ国内委員会委員に任命される。

12月3日

長崎YMCA創立50周年記念式及び長崎YMCA略史「長崎の市民と共に50年」発刊

西岡竹次郎県知事、田川務市長、中部悦良商工会議所会頭、ウィンスロップ・A・ロング北米YMCA同盟代表、斉藤惣一日本YMCA同盟総主事諸氏が列席。松前重義衆議院議員（東海大学総長）が記念講演を行う。

1956年（昭和31）50才

8月10日

『長崎外大同窓会報』（のちの長崎外大時報）第1号発行

10月30日

長崎外国語短期大学米英語科第2部第1回卒業式、卒業生42名。

12月

長崎保護司選考委員（～1957年11月）

1957年（昭和32）51才

4月

長崎ユネスコ協会会長就任（～1959年6月）

7月9日

長崎ユネスコ協会火曜クラブ（のち、水曜クラブ）発足、卓話：田川務長崎市長

各月第2火曜、ゲストを招き教育・科学・文化・国際理解と協力・人権の領域についてテーブルスピーチを聴く例会を催している。1997年7月40周年を迎え469回を数える。

7月13日

長崎ユネスコ協会、講演会を催す。講師：前田夛文氏（元文部大臣）

長崎ユネスコ協会では国際理解・文化に関する講演会を開催し、蝋山政通氏（1957年・1963年）、森戸辰男氏（1959年）、毛利元通氏（1960年）、坂元二郎氏（1970年）、前田義徳氏（1970年）などを招いた。

1958年（昭和33）52才

8月1日

文部大臣（灘尾弘吉）より日本ユネスコ国内委員会委員に任命される。

10月2日

長崎外国語短期大学、新校舎建築定礎式を行う。

原爆被爆10周年を迎えて、1954年（昭和29）長崎県・市は、長崎国際文化センター建設委員会を設置し諸事業を行った。焼失した袋町の長崎市公会堂に代わる公会堂もその中の一つであった。

長崎市は、同市本大工町の長崎YMCA会館敷地と市民運動場の一部分を建設地と定め、長崎YMCA会館の移転を求めた。

当初、代替地として城山町の長崎県護国神社跡地を求めたが神社復興のため不可能となった。ついで住吉町の長崎市所有の溜池跡地3,300坪を知り長崎市に移転先として求め田川務市長との間に解決を見た。当地は市街地とは離れており長崎YMCAとやむなく分離した。長崎YMCAは旧市街に新たな会館を借用しなければならなかった。

新校舎は鉄筋コンクリート造3階建（565坪）及び旧校舎を移築した木造モルタル塗2階建て（350坪）2棟で建設後援会（委員長・石坂日本銀行長崎支店長）の意向により設計施工を清水建設が請け負った。建設費4,000万円の内、募金1,200万、補助その他1,900万を予定した。なお土地代は831万円であった。なお、旧本大工町跡地は市有地であり木造2階建の移築のみの僅かな移転補償であったが、調度備品を含め後日、学校法人長崎学院と長崎YMCAとは財産の分与整理をなした。

1959年（昭和34）53才

4月10日

長崎外国語短期大学、長崎市住吉町243に校舎が竣工し移転する。

4月

長崎外国語短期大学、米英語科第一部に英文、商業、教養、第2部に英文、商業の各コースを配置する。

5月11日

長崎外国語学校を長崎学院専門学校に改組する。

7月21日

長崎YMCA総主事を辞任し副理事長に就任する。（～1974年2月）

7月

長崎北ロータリークラブ会長に就任する。（～1960年6月）

12月

英語教育発祥百年記念事業委員会（代表・青山武雄）、長崎における英語教育百年史を編纂発刊する。

長崎プロテスタント伝来史（プロテスタント長崎基督教百年記念誌）を執筆する。

プロテスタント宣教百年記念式が東京で行われ、長崎では10月10日東京神学大学北森嘉蔵教授を迎えて国際文化会館で催された。

このことに啓発されプロテスタント史に興味をもち論文を執筆すべく後年再度にわたって渡欧するも未刊におわった。

また日本洋学史と称する科目を設け講義し、学内にウィリアムズ、リギンス等の冠した建物を建築した。

1960年（昭和35）54才

長崎学院専門学校、長崎外国語短期大学付属高等学校設立計画

住吉新校地にはクリーム色・鉄筋コンクリート3階建の新築校舎の他に本大工町校地より移築した木造2階建の校舎があった。

学生数も少なく、募金も思うにまかせず学校財政は困難をきわめていたので活路を見出すべく、この旧校舎の利用が昭和34年頃から数年間にかけて種々検討された。

1959年（昭和34）5月、移転と法人名改称に伴い長崎外国語学校（各種学校認可）は、長崎学院専門学校に改称し、外国語科・英数学科・商業専門部の3学科を設置し、外国語科は2年、他は1年の修業年限とした。

この専門学校は事業発足時の長崎YMCA、とくにその教養科をモデルにしたものであり、その経験から英数学科（修業年限1年）を大学受験予備講座とする

ものであった。

この英数学科の大学進学予備校化は、当時長崎市には予備校が1校しかなかったので設立が重ねて検討された。

しかし何分隣り合わせに短期大学があり、また受験生の減少期（戦争中生まれ）でもあったので不調に終わった。

ついで高等学校の設立が考えられ学院の命運をかけるべく努力がなされた。昭和30年代後半は、わが国の経済の高度成長期で、いわゆる池田内閣の所得倍増論が喧伝された。

この様な中で高校教育の多様化がはかられ工業技術教育が推進された。本学もこの様な状況の中、昭和36年度開校を目指して当初長崎住吉工業高等学校（電子工業科80名）、後に長崎学院工業高等学校（電子工業科、電気科、機械科）と改め設立に向けて努力が重ねられた。

昭和37・38年になると、戦後生まれのいわゆるベビー・ブーム期の生徒が高校受験期を迎えた。

本学もこの機会をとらえ、昭和38年度開校を目指して再度長崎外国語短期大学付属高等学校普通科（男子200名）の設立をすべく懸命の努力をし、長崎県に設置認可申請を提出した。

しかしいずれも校地・校舎が狭小で短期大学施設として文部省に届け出たものであって、施設の使用も認められなかった。

2月6日

学校法人長崎YMCA学院、学校法人長崎学院に改組・名称を変更した。

3月31日

学校法人長崎学院理事長に就任する。（～1974年2月）

6月22日

長崎ユネスコ協会長に再任する。（～1974年2月）

1961年（昭和36）55才

1月1日

長崎YMCA、市内常盤町15番地、聖公会聖三一教会（元アメリカ領事館）の1階約100坪（330㎡）を賃借し会館を移転した。

3月15日

長崎ユネスコ協会、長崎ユネスコ・ハウスを市内馬町14番地に開設する。

9月19日

長崎ユネスコ協会市民講座で「幕末、長崎における大隈重信とその働き」を講演する。

11月25日

長崎外国語短期大学、第1回ライシャワー大使杯西日本高等学校英語弁論大会を開催する。

12月10日

学校法人長崎学院、学債2,000万円を発行する。

担保に供する資産もなく、借入・返済の方法もない状況にあった。

理事長就任後ただちに学債を発行することにし、日興證券副社長・峰岸二郎氏の尽力により同社より2,000万円を発売し、関係者・父兄また各地の金融機関等に依頼した。

クリーム色の近代的な3階建の学舎は戦後の当時としてはめずらしいコンクリート建造物であり、学生・市民に喜ばれて学園の発展を感じせしめた。

しかし短期大学制度が施行されて9年、その間に男子学生の卒業後の進路がとざされ、短大は女子校が主体となった。男子校の本学は学生が減少するなかで移転した。

1959年（昭和34）は第1部1年45名、2年22名の学生数となった。大きな痛手を受け経常費にも事欠くあり様になった。

建設資金は殆どを募金に頼るべく建設委員会が結成された。石坂一義日本銀行長崎支店長（石坂泰三経団連会長子息）が委員長となり多くの協賛者を得て募金活動が行われたが思う様に集められず財政運営は苦渋の連続であった。

そういう状況の中で建設会社（清水建設）が処分すべく措置がなされた。佐藤喜一郎氏（三井銀行社長、日本ユネスコ協会連盟会長）の尽力により延期を見た。又ある時には長崎市への土地代金支払いが長崎市議会で取り上げられたこともあった。

この間激務と心労が重なり身体の不調をもたらし、通勤途上倒れたり、上京中視力障害があったりするなど健康を害することが多くなった。

古屋野宏平理事（国立嬉野病院長、のち長崎大学長）はいたく心配し療養をす

すめたので、国立嬉野病院に入院、暫時加療した。

昭和40年に至りわが国経済の高度成長、東京オリンピックによる国際化、ベビーブームの18才人口の到来などにより女性が短大に進学する機運が生まれ、各地に短大・大学が創設された。

長崎外国語短期大学も1964年（昭和39）を境に女子学生が増え徐々に学院財政も好転し始め、1968年（昭和43）遅延していた学債を完済することが出来た。

1962年（昭和37）56才

3月

長崎外国語短期大学米英語科を外国語科に改組し、第1部に英語・仏語・西語・露語の各専修を置き、各専修に語学・教養・商業の各コースを設けた。

4月

長崎YMCAは再び法人格を得、財団法人長崎基督教青年会に改組した。

1963年（昭和38）57才

4月

長崎外国語短期大学女子寮を開設した。

昭和30年代より女子の短大進学者が増え始め本学では39年度に女子学生が男性より多くなった。九州各地からのこれら入学者を収容すべき女子寮の必要があったので、移築していた旧本大工町校舎を急遽修理しこれに当てた。

これ以降、昭和57年の閉館まで20年の間、多くの学生が起居を共にし勉学に励んだ。後にフルベツキ女子学生寮と称した。

1964年（昭和39）58才

7月

論稿「大隈重信と致遠館考（一）」を『長崎外国語短期大学論叢』（第6号）に執筆

1965年（昭和40）59才

1月18日

長崎ユネスコ協会は稲佐国際墓苑復興協賛会を設立し悟真寺境内外国人墓地の復興整備を行う。

長崎ユネスコ協会はこれが復興のため協賛会を設立し、募金1,600万円を集め整備した。

古屋野宏平理事（国立嬉野病院長）のつよい勧めで国立嬉野病院にて療養する。

12月1日

長崎外国語短期大学、創立20周年を祝い、国際事情研究所を設置。

校歌・校旗・校章を制定した。

「山北甫」名にて校歌を作詩する。

長崎外国語短期大学校歌　　作・山北甫（青山武雄）

緑なす丘はつらなり　永久の書生命あり　東西の言語修めて
朝烟り　つつましく　ひたぶるに
歴史の港鎖国の窓に　基い礎えたり活ける厳に　求めて尽きし世界の文化
海は世界の友を呼ぶ　真理は人を自由にし　言語は養う広き視野
海は世界を結ぶ糸　真理は人を解き放つ　言語は結ぶ民と民
あゝ友よ胸張れ　あゝ友よ目覚めよ　あゝ友よ手をとれ
外語こそ　われらこそ　外語こそ
時代を担う学園なり　使命に生きる学徒なり　平和を築くとりでなり

なお、杉原広一（鎮西学院高校教諭のち院長）が作曲を担当した。また記章に加えて校章が制定され校旗に用いられた。

ラテン語のVIA VERITAS VITAの頭文字を組み合わせたもので、「ヨハネによる福音書」14章6節の「わたしは道でり、真理であり、命である」と言う聖旬からとり長崎外国語短期大学の創立精神であるキリスト教の信仰を表明したものである。

12月

第24回国民体育大会長崎市準備委員

1966年（昭和41）60才7月

夏期休暇中、日本洋学史資料蒐集のため、イギリス、フランス、オランダ、アメリカに出張する。

1967年（昭和42）61才

長崎外国語短期大学学生会館・食堂が開設

論稿「外国語教育の変遷（1)、徳川時代」『学校教育全書』を書く。

労働省労働基準局長より労働基準行政につき感謝状をうく。

7月

長崎外国語短期大学、東南アジア学生調査団制度が発足する。

第1回東南アジア学生調査団が結成され、台湾、フィリピン、香港、タイ、シンガポール、マレーシアを視察、訪問先学生と交流をする。

これ以降学生の海外研修が漸次増え、それはアメリカ、イギリス、フランス、スペインの提携大学での短期語学研修へと発展した。

長崎北ロータリークラブ1965.6会報に「私の信条」を記す。

私の信条

無理をしない、常の如く行く（as usual）(1)

詮（せん）方つきても望を失わない（バイブルの言葉）(2)

(1)1968年7月18日長崎新聞好きな言葉欄に「常のように」(as usual)と書く。

(2)「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方にくれても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」コリント第2．4:8･9「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを」ロマ5：3・4など。

昭和30年代の学園経営の最も困難な数年間。この聖句を胸に励み、漸く回復の見え始めた昭和40年代始めに実感として書きしるした。（ロータリー・クラブ会報）

1969年（昭和44）63才

6月

長崎YMCA、市内万才町7番地、旧協栄生命ビル（4階建）3・4階に移転するも直後に所有者より譲渡による解約の申し出がある。

論稿「阿蘭陀通詞の研究」『長崎外国語短期大学論叢』（第11号）を執筆する。

長崎の歴史、とくに16世紀の長崎、平戸におけるポルトガル人の宣教と通商、19世紀居留地時代以降の長崎におけるプロテスタント宣教師の活動について興味をもった。短大では洋学史を開講し講義をした他、欧米の調査もなし資料の蒐集もしたが研究は未完に終わった。

7月

夏季休暇を利用し、東欧諸国の教育事情調査のためソ連邦その他、東ヨーロッパ8カ国に出張。

10月

長崎開港400年記念実行委員

1970年（昭和45）64才

2月

長崎ユネスコ協会、稲佐国際墓苑復元完工

4月

長崎外国語短期大学、アドバイザークラス制度が発足する。

6月

長崎ユネスコ協会、第26回日本ユネスコ運動全国大会開催

大会テーマ「70年代の教育とユネスコ」長崎市公会堂
記念講演　前田義徳氏、記念演奏　安川加寿子、講師　永井道雄氏、髙坂正堯氏
アンセルモ　アタイス氏

7月

長崎ユネスコ協会、国際教育年記念式典にて文部大臣より表彰される。

8月

長崎外国語短期大学、教員海外長期研修制度が発足した。

10月

日本英学史研究会第7回大会（長崎市活水女子短大）にて大会会長を務める。

12月

長崎外国語短期大学、文部省より経常費補助のため国庫助成を受ける。

パリでの学生闘争に触発され世界各地で学園闘争が行われたが、わが国では安保改定期にあたり、東大を始め全国的な学園改革闘争となった。これが契機となり大学への国庫助成が行われる様になった。

1971年（昭和46）65才

1月

長崎外国語短期大学、外国語科英語専攻90名、仏語専攻15名、西語15名に専攻定員増加が認可される。

1962年（昭和37）以降、各語学の専修を設けていたが、本館1号館建築を機に永年の希望であった英語・仏語・西語各専攻と定員増が認められた。なお2部は70単位取得のため2カ年半修了となる。

3月

長崎外国語短期大学、本館（1号館）建築竣工

鉄筋コンクリート5階建、面積1,444㎡、建築及び設備費8,600万円

設計・施工　金子建設

1階　管理会議室棟・2階　研究室・3階　チャペル・4階　図書館・5階LL・AVR室。

1号館の完成により小規模であったが短期大学としての施設・設備は全て整備がなされた。

学生、とくに女子学生の増加とともに、この建設は昭和30年代からの苦難の時代に終止符をうち、その後の本学躍進の礎となった。

4月23日

創立25周年記念式及び1号館献堂式

創立25周年を記念して1号館の建設及び教員海外研修制度を創設した外、旧館（2号館）の設備等を改造した。

又奨学生の増員がなされた。なお従来創立記念日は短期大学開学日5月26日

であったが、昭和20年12月1日の長崎YMCA創立（再建）の日を記念して12月1日を創立記念日とすることに決定した。

本学の使命

社会の進化に伴い、高等教育に対する国民のニードが高まることは世界的傾向である。わが国でも、最近、大学教育を受ける者の比率の増加がみられる。たとえば昭和38年には20.9％であった大学進学率は、同44年には24.1％に達している。このような現状をとらえて、昭和46年6月に出された中央教育審議会の答申「教育改革のための基本的施策」は多くの問題を我々の前に提起した。その中で今後の方向として、高等教育の大衆化と学術研究の高度化の2点を指摘し、複雑化する社会への適応力をもった人材の育成を目指している。これらのことを前提として、我々はさらに次の2点を本学の特色として強調したい。その1は本学に於ける宗教々育の重視である。私学の大きな利点の1つは宗教々育にある。本学ではキリスト教にもとずく宗教々育を重視する。明治以来、わが国に於ける高等女子教育に果たしたキリスト教学校の役割は非常に、大きなものであった。最近の女子大生の増加に伴い、この点を今一度再確認すべきだと考える。

第2点は社会教育、生涯教育の必要性から、夜間学部の存在に注目したい。価値体系が多様化し、さらに複雑化する今後の社会では、新しい学問への要求はより高まるはずである。そのような必要性をもった社会人に対して、教育の場が開かれることの必要性は言をまたない。我々は社会と共に歩む学園を指向したいものである。

（創立25周年記念式で講演したものを1972年（昭和47）1月30日付『長崎外大時報』11号に要約記載した。）

6月

長崎ユネスコ協会、韓国大邱ユネスコ協会と姉妹協会締結。

7月

長崎YMCA、市内万才町7番地1に新築となった住友生命ビル12階、約35坪（120㎡）を賃借し移転する。

8月

大邱ユネスコ協会より招待をうけ、儀礼訪問をする。

12月

長崎市都市提携委員（～1974年2月）

1973年（昭和48）66才

3月

長崎外国語短期大学、卒業諸費を徴収し卒業アルバムの発刊、卒業パーティ等の費用にあてる。

4月

長崎外国語短期大学、外国語科第1部英語・仏語・西語各専攻に語学・社会福祉・商業各コースを設置した。

第2次大戦後、わが国は福祉社会を目指して国家の再建をなしてきたし、また将来の高齢化社会のために福祉の場で働く人を養成することは大変重要なことであった。キリスト教主義学校での女子教育にはもっとも適した教育でもあると考えた。

創設当初よりの商学に加えて、社会福祉コースを外国語科の副専攻としてまた将来は学科に昇格すべく設置した。

なお、スタッフとして4名をこれにあてた。

6月

長崎ユネスコ協会、長崎歴史散歩始める。

1985年（昭和60）には『長崎史情散歩』を発刊、その後毎月小冊子を発行する。

7月

長崎ユネスコ協会、創立25周年記念式を行い「ながさきユネスコ」を発刊する。

1974年（昭和49）67才

1月

キリスト教学校教育同盟西南部会（沖縄）に出席、さらに台湾を視察する。

2月

体調不調でただちに長崎市・聖フランシスコ病院に入院するも病状が急変し2月23

日肝硬変にて永眠する。

2月26日

長崎外国語短期大学葬を長崎国際文化会館講堂にて行う。

青山武雄長崎外国語短期大学葬

司式者　西村　哲教授
奏楽者　桑山寿美子姉
前　奏　奏楽者
聖　書　ヨハネ11章25・26　司式者
賛美歌　66　一同
聖　書　詩篇90篇1～17　司式者
祈　禱　司式者
賛美歌　510（個人愛唱歌）　一同
故人略歴　吉岡秋義教授
説　教　鎮西学院長　鮫島盛隆
祈　禱
賛美歌　320　一同
弔　辞　長崎市長　諸谷義武
　　長崎ユネスコ協会代表　三宅康代
　　長崎YMCA代表　牛津信義
　　ながさき北ロータリークラブ代表　中部長次郎
　　学校法人長崎学院理事代表　古屋野宏平
　　長崎外国語短期大学同窓会代表　吉田親生
　　キリスト教学校教育同盟西南地区代表　尾崎主一
弔　電
頌　栄　541　一同
終　禱　司式者
後　奏　奏楽者
挨　拶　遺族代表
献　花　一同

折から学校は春季休暇中で、雪まじり厳寒の日であったが、教職員はもとより、

前学長の遺徳を偲ぶ名士貴紳の方々が、約600名程参列して、別離の悲しみの中に厳粛な式典を行い、その在天の霊に対し、心から平安の祈りを捧げたのであった。

なお、4月24日には、学生参加のもとに本学で追悼礼拝を行い、吉見豊理事が故人を偲び切々たる追悼の説教をなされた。(『長崎外大時報』14号)

2月23日

政府より正五位勲三等瑞宝章を受位し受勲する。(田中角栄総理)

1975年(昭和50)

3月

長崎外国語短期大学、『論叢17号　故青山武雄学長追悼記念号』発行

11月

長崎外国語短期大学「30年のあゆみ」発刊する。